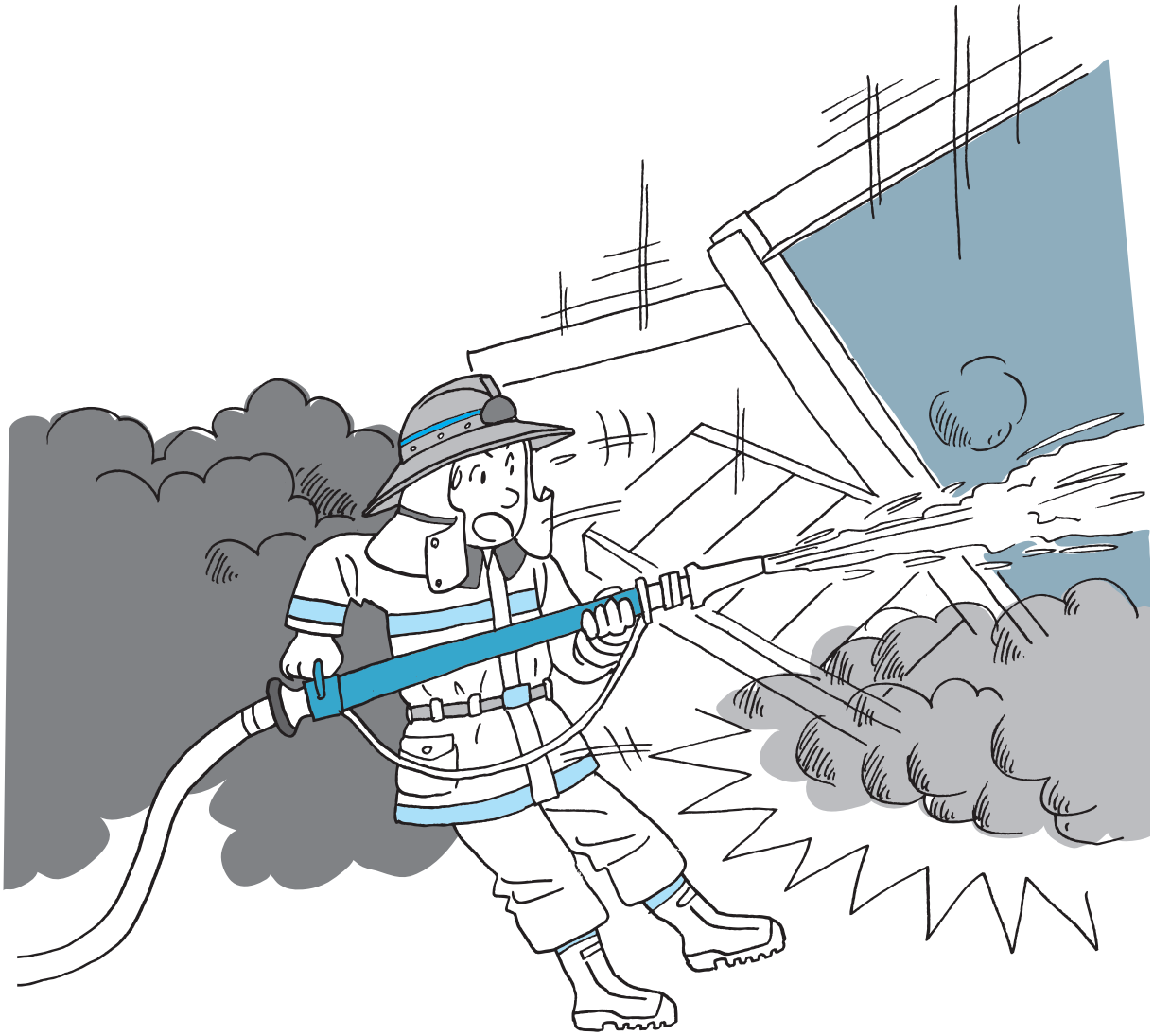
建物火災 事例 44

木造住宅の火災に出動し、筒先担当員として放水のため建物内に進入しようとした際、屋根が崩れ落ちてきた。



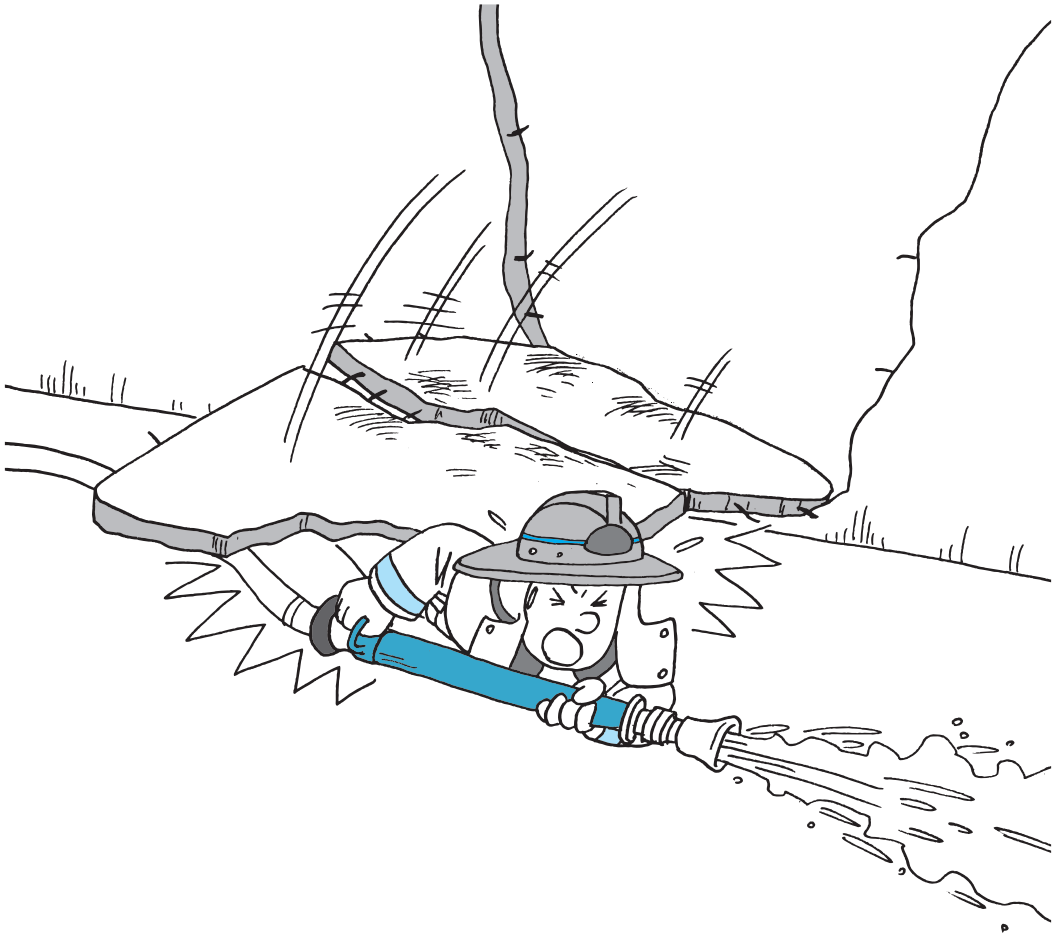
結果 負傷なし

対策

木造建物炎上火災の場合は、上部の梁、柱、天井、屋根瓦等の落下の危険を目視して確認するとともに落下の恐れがあれば、トビ口又は放水により落下物の危険を取り除く。

建物火災 事例 45

木造２階建て店舗の火災に出動し、消火活動中、崩壊した壁の下敷きとなった。



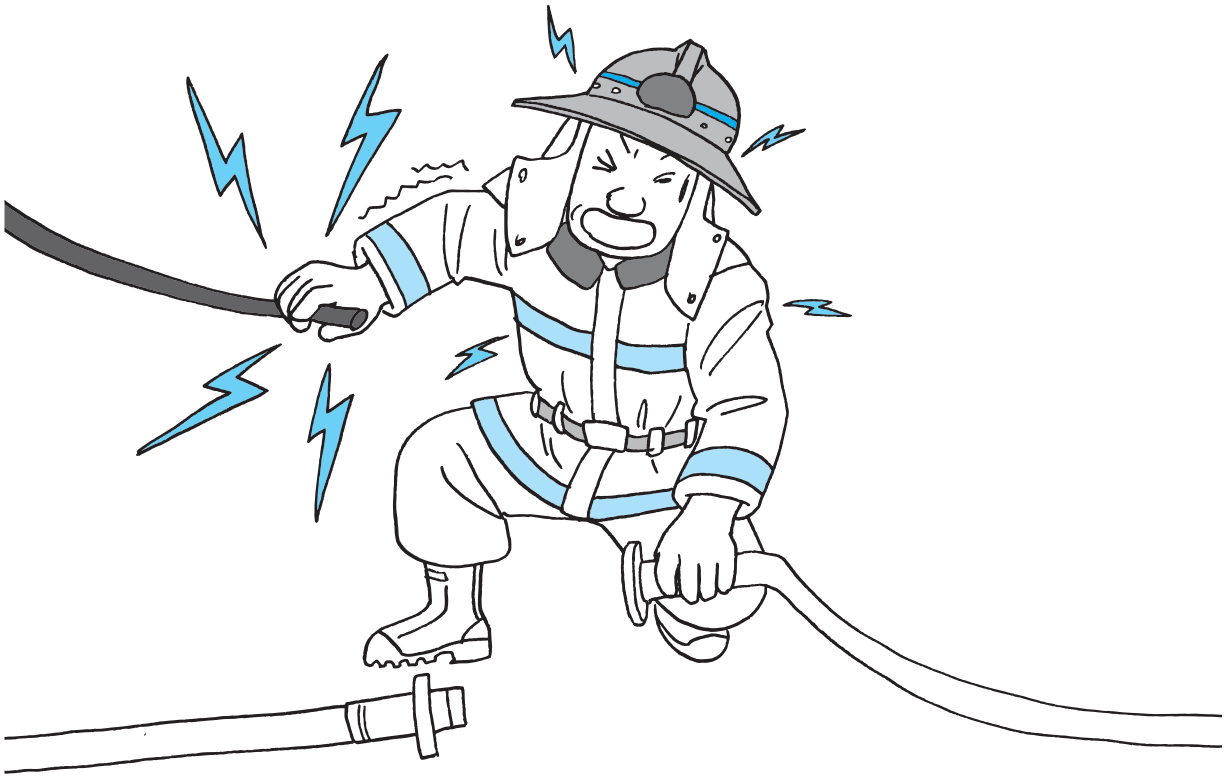
結 果 肩、背部打撲

対策

内壁、外壁の崩壊は火災による柱等の保持力低下のための、はく離落下であり、崩壊前に壁が水分を吸収して重みに耐えきれず、膨らみ、崩壊するので、亀裂、膨らみ等周囲の状況を確認して行動する。

建物火災 事例 46

木造２階建て店舗の火災に出動し、ホース延長作業中、目の前に垂れ下がっていた電線を手で除けた際、電線が通電している状態であったため火傷した。



結果 左手掌部電撃症

対策

電線が垂れ下がり危険がある場合には、電線と作業者が接触しないように板等で遮へいをして作業する。
速やかに電力会社へ通報し、電源遮断を要請する。

建物火災 事例 47

飲食店の火災に出動し、消火活動に当たっていた際、プロパンガスボンベが屋内にあるのを発見し、ボンベが爆発するかと思い後退してしまった。

結 果 負傷者なし

対策

火災現場にプロパンガスボンベ等がある場合には、破裂など二次災害防止のため、直ちに指揮本部に報告し情報を共有する。
ボンベの冷却に当たっては、ボンベが倒れないよう噴霧注水とし、遮へい物を使用し姿勢を低くして行動する。

建物火災 事例 48

薬品製造工場の火災に出動し、現場周辺の交通整理をしていた際、異臭がして喉が痛くなった。

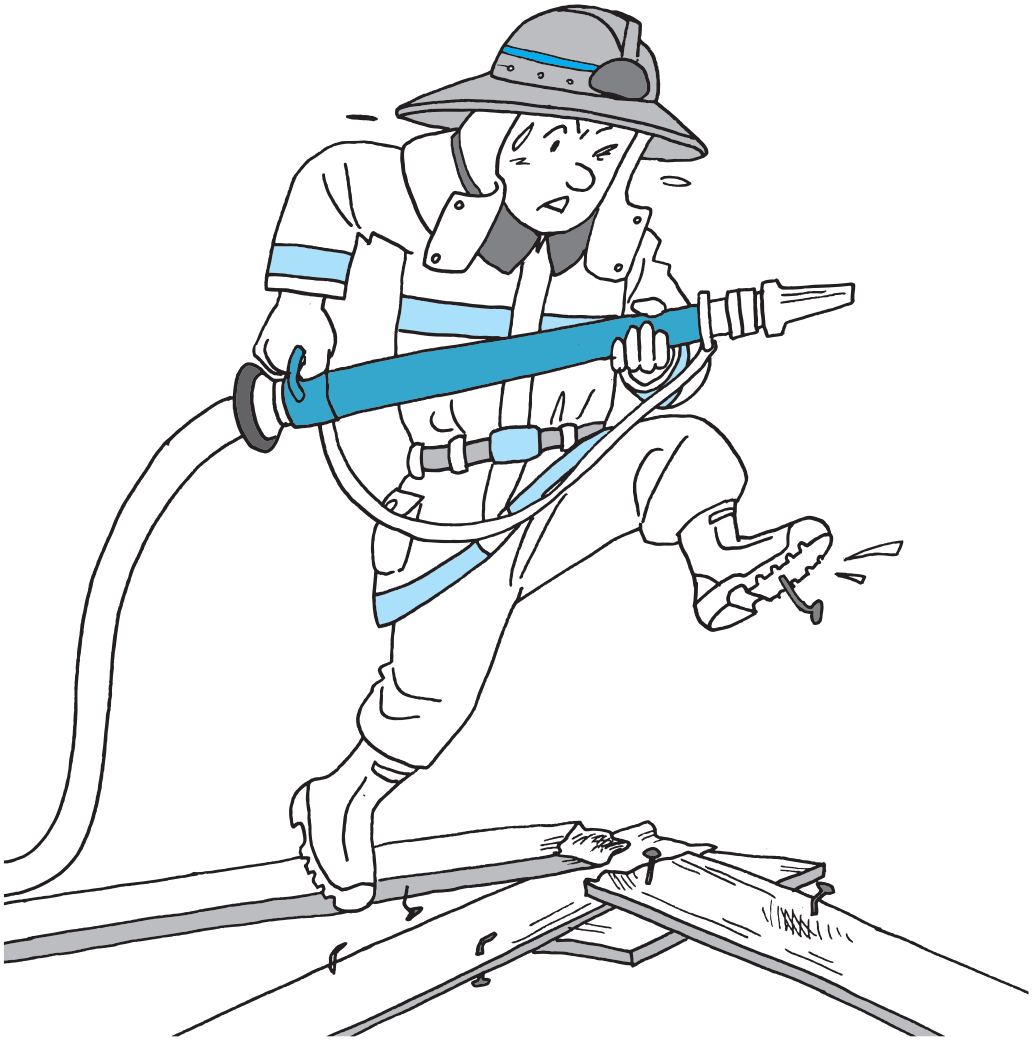
結 果 負傷者なし

対策

化学薬品工場等の火災では、毒・劇物ガスが発生する危険が大きいので、現地指揮本部のもと、一体的行動を取る。
消防団の装備、資器材、技術の範囲内の活動とする。

建物火災 事例 49

木造平屋建て住宅の火災に出動し、火災堆積物の上で残火処理中、周囲が薄暗く注意力が足りなかったため、堆積物の中の釘を踏んでしまい長靴を貫通した。



結 果 左足底部挫創

対策

残火処理活動においても照明器具を活用し、周囲の状況に注意する。
必要な場合は堆積物等の除去作業を併せて行いながら、残火処理活動を行う。

建物火災 事例 50

直線の県道沿いの建物火災に出動し、３台のポンプ車が片側に停車し、ホースが道路を横断する形で延長し放水作業に当たっていた。夜間のため光る警棒を持ち反射板付きのベストを着用した警備員を県道の上下に２名ずつ配置し、一般車両を迂回させていたが、警備員の制止を無視した一般車両が速度を落とさず進入し、ポンプ車のすぐ横をホースブリッジの上を通らずに走り去った。

結 果 負傷者なし

対策

交通量の多い道路付近の火災に際しては、警察官に協力を求め、迂回道路があればそちらに誘導してもらう（消防法 28 条）。

建物火災 事例 51

火災現場付近の片側一車線の市道で、消防車両が片側道路上に停車しているため交互通行の交通整理を行っていた際、交通誘導員を１名しか配置していなかったため、両方向から一般車両が同時に通行し、正面衝突しそうになった。

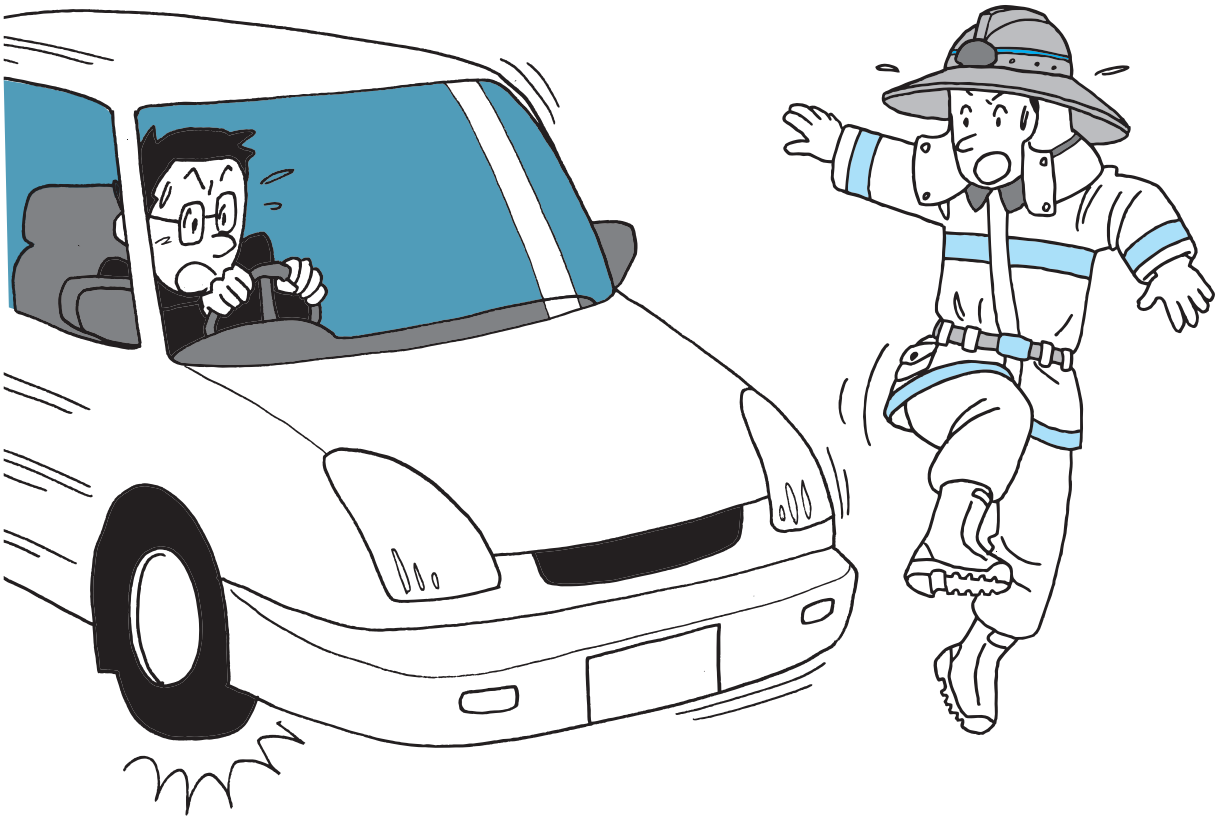
結 果 負傷なし

対策

両方向に誘導員を配置し、互いに連携をとりながら歩行者の横断等にも注意する。また、必要に応じて、誘導員を増員する。

建物火災 事例 52

建物火災に出動し、現場付近の交差点で、付近の住民や通行する一般車両の交通整理を何も持たず（赤灯等）に行っていた際、火災現場に目を向け前方を見ずに走行してきた一般車両が交通整理をしていた団員と接触しそうになった。



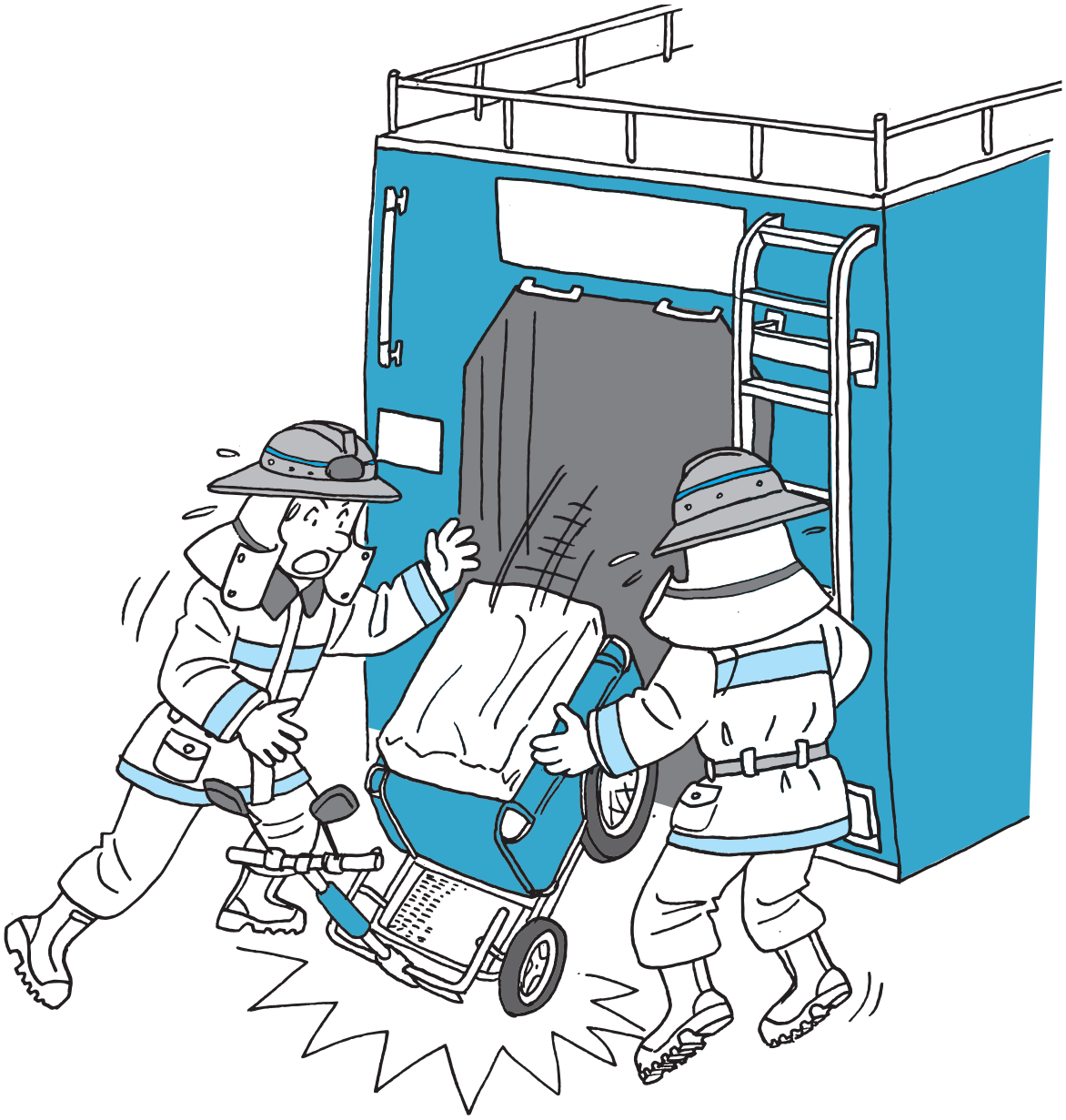
結 果 負傷なし

対策

交通整理を行う場合は、単独ではなく複数の人員で行い、夜間の場合は蛍光反射チョッキを着用し、赤灯やライト、警笛等を活用する。
交通整理を行う場所（自分のポジション）の安全面を考慮して行う。

建物火災 事例 53

火災現場に出動し、鎮火後撤収作業中、２名でホースカーを車両に積み込んでいた際、レールから脱輪させてしまい、ホースカーが落下した。



結 果 負傷なし

対策

ホースカーを積載する場合には、車輪ごとに１名、ハンドル部に１名の計３名で行い、不測の事態に対応できるようハンドル部操作員は、いつでもブレーキ操作ができるようにしておく。
確認呼称を確実に行う。

建物火災 事例 54

建物火災に出動し、現場付近の消火栓に部署して筒先担当者と筒先補助員がホースを延長するため、らく車を降ろそうとしていた際、足元が暗く周囲の野次馬の喧騒でお互いの声が聞こえにくい状態であったことから、らく車を降ろすタイミングが合わず、１人で降ろす形となり重さを支えきれず足の付近に落としてしまった。

結果 負傷なし

対策

重量物を持ち運びする際には、１人で行わず、声を掛けあいながら協力して行う。また、足元及び足の位置を確認してから作業する。

建物火災 事例 55

建物火災に出動し、鎮火後、消防車両付近で消火用ホースの撤収作業中、周囲が薄暗く、道路も狭い状況で、下を向いてホースを巻き島田にしていたときに顔を上げたところ、目の前に消防車両のステップがあり、ぶつかりそうになった。

結果 負傷なし

対策

鎮火後の作業は疲労が多く集中力が非常に低下しているので、指揮者は各団員へ安全確認の徹底を指示する。
安全管理上、指揮者を各現場ごとに配置する。

建物火災 事例 56

木造２階建ての火災現場で、残火処理のためトビ口を使用して焼けた器物を除去する作業をしていた際、現場にあったクレゾール原液が飛散した。

結果 左手背から前腕第２度科学熱傷

対策

残火処理をする場合には、関係者に毒劇物等の危険物品の有無を確認してから行う。

建物火災 事例 57

木造２階建ての作業小屋の火災に出動し、負傷者が中にいるとの情報があったので救助のため階段を駆け上がったところ、練炭のそばで倒れている者を発見し、ただちに窓ガラスを開ける等の処置をしたが、あとでヒヤリとした。

結果 負傷なし

対策

屋内進入に際しては、入り口のドアー開閉操作と臭気等に十分注意してから進入する。

負傷者の救助が最優先だが、まず、消防職員に連絡する。

建物火災 事例 58

夏季昼間の建物火災に出動し、筒先担当員として木造家屋の消火活動中、炎天下で防火衣等を装着した状態で長時間放水を行ったため脱水症状を起こし、筒先員交代後、その場に倒れた。

結 果 熱中症

対策

高温多湿時に長時間活動に従事する際は、水分を十分に補給するとともに応援等により要員増強を図り適時交代を行う。
交代後は防火衣の着脱等体温の上昇防止の措置を行う。

建物火災 事例 59

防火構造２階建物火災に出動し、自宅直近であったことから積極的に消防隊の活動（ホース延長、投光器による照明作業、畳はがし等の局部破壊）を支援していた際、突然、意識朦朧となった。
自宅直近であり、団員としての責務から自身の健康状態を顧みず活動に従事した。

結 果 脳内出血

対策

消防団幹部は平素から団員の健康状態を把握し、本人の自己チェックや申告に基づいて観察、問いかけを行うなど団員一人ひとりを観察して、異常をつかむ。

建物火災 事例 60

マンションの火災に出動し、４階まで階段を上り空気ボンベを搬送し、鎮火後は階段を下って搬送した。夏の暑い日中に防火服を着ていたため大量の汗をかき、気分が悪くなった。

結 果 熱中症

対策

指揮者は、状況に応じて防火衣無しで作業させる時もあるが、その時は安全管理員を多く配置し、団員の健康状態を監視する。
熱中症になる危険性があるので、水分の手配を早めに行う。